

2019年2月

聖句随想・折々の言（ことば）

「人生いかにいくべきか

～ 老シメオンの物語より ～」

牧師 森 言一郎

シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。「主よ、今こそあなたはお言葉どおり この僕を安らかに去らせてくださいます。私はこの目であなたの救いを見たからです。」

（ルカによる福音書 2章28節～30節）

福音書記者ルカの筆によるクリスマス物語。その初めとおわりに登場するのが老人たちであることは、偶然でしょうか。

わたしにはそうは思えません。いえ、わたしはやっと気が付きました。歳を重ねた人々が、救い主イエス・キリストの降誕物語の単なる引き立て役に

なっているのではない。彼らは、なくてはならない存在感をもって読み手にそっと近づいてくるのを感じるのです。

*

冒頭に登場するのはザカリアとエリサベトと**目**という老夫婦でした。そして、締めくくりに登場するのが老シメオンと女預言者アンナです。彼らは夫婦ではありませんが、信仰をもってエルサレムの神殿に仕え続けて来た老人であることは間違いありません。

このような人たちがイエスの誕生に合わせて登場しているのは実に興味深いことです。そして、これこそが「順序正しく書いて献呈する」という福音書記者ルカの思いでした。

*

つここではシメオンについて紹介したいと思います。**く**なぜなら彼は、イエスを胸に抱

いたときに、「もうわたしは、いつ死んでも構わない」という意味の言葉を口にするからです。

地上の旅路に終着があることを見据えつつ、それならば、どうしてもこのことだけはという祈りと願いを持ち続けてきた人。それがシメオンでした。

*

わ たしが神学生時代にご指導下さった旧約学の木田献一先生が、その最晩年、ご自宅の病床にある時に口にされていたのがシメオンに関する御言葉だったと、奥さまのみな子さんからお聴きしたことが忘れられません。

シメオンについてルカはこう紹介しています。せっかくなので、先頃発売されたばかりの『聖書協会共同訳』を開いて見ました。それが冒頭に掲げさせていただいた御言葉です。

*

そもそもシメオンという人がどのような人物であったのかについて確かめてみると次のように記されています。

「エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。また、主が遣わすメシアを見るまでは死ぬことはない、とお告げを聖霊から受けていた」

*

シメオンは、全ての人に訪れる「その日、その時」が来ることに對して望みを持ち続けていた人でした。そして彼は、ヨセフとマリアの手からイエスを抱き上げたその時に、時が満ちたことを自覚し、感謝の歌を歌い始めたのです。

この賛美歌をいにしえの教会は「シメオンの賛歌」（ラテン語で「ヌンク・ディミティス」）と呼んで大切にしてきました。

*

シメオンが「イエスを胸に抱いた」という描写を何気なく読み過ごすのはもったいないことです。

わたしたちはこの場面を、象徴的な出来事として読むことが必要だと思うのです。つまりそれは、イエスを「抱擁する」とは、今を生きる我々にとってどういうことなのかを思い巡らすことに外ならないからです。

*

現実的には、どんなに願っても、今のわたしたちはイエスを抱きしめることなど出来ません。しかし、御言葉を暮らしの中でしっかりと抱き続けるという形での視座の転換によって、老シメオンの人生に我々の人生をピタリと重ねることが出来るのではないか、と思うのです。

福音書記者ルカは、ほんとうに、そーっとではあるけれど、明確な意図をもって、そのようにして

みることを福音書の読者に伝えているのです。

*

さ らに肝心なことは「祭司」でも「預言者」
とも記されていない、実直な信仰者である
シメオンのような人物を通して、福音の物語が幕
開けすることに深い慰めと希望を感じ取ることが
できます。

もう一度記しておきます。シメオンが祭司や預言
者ではないことは極めて重要です。神さまは、名
前以外には何者であるのかが分からない、そのよ
うな人を必要とされているからです。

*

イ エスさまを腕に抱いたときのシメオン。原
文では、彼の腕が折れ曲がっていたと推測
される書き方がされています。

おそらく、折れ曲がっていた理由は老齢だったか

らでしょう。その腕にはもはや力強さはありません。けれども、弱い力しか残っていなかったにもかかわらず神さまはシメオンを用いられたのです。

そして、シメオンは幼子をしっかりと抱きしめます。終わりの時を待ち望んでいたシメオンは、この時たしかに「救い」を抱きかかえました。彼は待ち続けていた「救い」を落とすわけにはいかないのです。

*

神さまが必要とされたのは特別な人ではありません。力は弱くなってしまったけれど、忍耐強く待ち望む、まじめ一徹な者を必要とされるのです。救いのみ子を迎えたシメオンの少しも目立たない幸いがあります。

わたしたちは、わが主のみ言葉をどれほどしっかりと抱きしめて生きて来たのだろうか、という福音からの問い掛けを受けています。

その答えを求めるためには、十字架のイエス・キリストを腕から放り出し、見捨てて逃げ出してしまふ己の弱さと貧しさと真っ正面から向き合うことを忘れてはならないのです。飼い葉桶の幼子キリストの貧しさは、わたしたちの貧しさゆえであることを、深く胸に刻みたいのです。

*

夕 イトルに記した「人生いかにいくべきか」は、若き頃に哲学を学んだ、今は亡きわたしの父・誠太郎が晩酌をしながら、時々口にしていた言葉です。

2018年の年末に、『ガンジスに還る』という映画を観た後に思い出し、ここに用いさせて頂きました。

その映画の老主人公は、自らの死期を悟り、働き盛りの息子を無理矢理に伴ってガンジス川への旅を始めた人物でした。end